古プロヴァンス語の複合時制 *)

後藤　斉

0. 周知のように，ロマンス諸語はラテン語になかった複合時制を発達させた。古プロヴァンス語でも既に，過去分詞はあらゆる法と時制（命令法を除く）におかれた助動詞と結びついて複合時制を形成し，更には，いわゆる重複合時制をつくるにいたることも，稀にではあるが，存在する。

本稿では，古プロヴァンス語の複合時制を実例に即して検討するが，併せて，中世の文法家がそれをどう取扱ったかも見る。

なお，文法用語は，形の上での対応によって現代フランス文法の用語を当てるという慣用に従ったが，この方法が最善であるとは考えていない。

1. 古プロヴァンス語はトルバドゥールと呼ばれる一群の詩人が用いた言語として広く知られている。北仏からドイツにまで，その文学的影響が及んだことは，ここに言うまでもない。

しかし，古プロヴァンス語は言語学史上でも興味のある位置を占めている。即ち，これはロマンス語のうちで初めて言語研究の対象となった言語なのである。視野をロマンス語圏からヨーロッパ全体に拡げても，研究対象とされた言語としてはかなり早い方に属する。

中世においては，文法とは即ちラテン文法のこと，とする考えが支配的であったから，俗語が文法的考察の対象になったこと自体，画期的なことであった。

そのような文法書で我々が見ることのできるのは以下に挙げるものである。

1) Donatz Proensals[1]（プロヴァンスのドナトゥス）. Uc Faidit により1240年頃イタリアで作られた。前半は名前の通りラテン文法に則って八品詞を説明するものだが，後半は脚韻のリストになっている。

2) Razos de trobar[2]（詩作の理法）. カタロニアの Raimon Vidal により12世紀末ないし13世紀に書かれた。八品詞の解説もあるが，むしろ，詩作における正しい言葉通いがどのようなものかを教えることを目的としている。

3) Doctrina d'Acort[3]（調和の教理）. Terramagnino da Pisa によりサルジニアで13世紀後半に作られた。2)を韻文化し，かつ，例を入れかえたものである。

4) Regles de trobar[4]（詩作の規則）. Jofre de Foixà が1290年頃，シチリア王 Jacme II 世の命によって著したものであり 2)を，ラテン文法を知らない人のために分りやすく書き改めたものである。

5) Las Leys d'Amors[5]（愛の掟）. トゥルーズ芸文協会が1356年に発布，前半は詩形を細かく分類して解説したものだが，第三巻は用例の豊富な文法書である。

（この他に，むしろ詩法解説書というべきものが Marshall（1972）に三つあり（Doctrina de comprendre dictats, Two anonymous treatises from Ms. Ripoll 129），Bartsch の Chrestomathie[6]にも別の作品（Traité de poétique）が見られる。）

これらのものは，しかし，文法書と名づけられるとはいえ，学問的関心から著されたものではなく，詩をプロヴァンス語で誤りなく書くための手引きとなることが究極の目的であった。しかも，その基礎となったのは中世初期以来のラテン文法のわく組みであって，それを単に古プロヴァンス語にあてはめたものである。従って，これらには理論的な独創性が見られないと断じても，酷に過ぎるとは言えない。

この独創性という点においては，我々の見ている文法書は，それに先立つ，北欧の逸名氏の手になる「第一文法論文」[7]に及ばない，ということになる。これは既に12世紀に，現代の音韻論に近い考え方をしていたのである。

とは言っても，上に挙げたように比較的多くの文法書が著されたことは，当時の古プロヴァンス語に対する関心が並々ならぬものであったことを示していると思える。更に，これらがラテン文法のしき写しであったとしても，この過程が全くスムーズであったはずもない。ラテン語になかった複合時制がどのように取扱われたか見るのは興味深いことである。

但し，上に挙げたもの全てが動詞の活用体系を系統的に扱っている訳ではない。比較的くわしい Donatz Proensals（以下，DP），と Las Leys d'Amors（以下，LA）を主に取り上げることにする。

2. 中世の文法家は一致して，（分詞以外に）五つの法と五つの時制を，古プロヴァンス語に認めている。一人称単数形を例として（不定法，命令法は例外）それぞれの形式にこれがどのようにあてはめられていたかを，表にまとめてみよう。

中世の文法家による活用体系

amar	不・現，半	aver amat	不・完，大
	不・現		不・半
am	直・現	ai amat	直・完
	直・現		──
amava	直・半	avia amat	直・大
	直・半；接・半		直・大
amei	直・完	aic amat	──（?）
	直・完	（前過去）	──
amarai	直・未	aurai amat	接・未
	直・未	（前未来）	接・未
amaria	希・現，半；接・半	auria amat	希・完，大；接・大
（条件法Ⅰ）	希・現		──
amera	希・現，半；接・半	agra amat	希・完，大；接・大
（条件法Ⅱ）	希・現		──
ame	希・未；接・現	aia amat	接・完
（接続法現在）	希・未；接・現		接・完
ames	希・現，半；接・半	agues amat	希・完，大；接・大
（接続法半過去）	接・半		希・大，接・大
ama	命		
	命		

注：それぞれ，上欄はLA	直説法	indicatius
下欄はDP	命令法	emperatius
──は，該当の形が扱われていないことを示す。	希求法	optatius
	接続法	conjunctius
	不定法	infinitius
	現在	prezens
	半過去	preteritz inperfagz (L.A.) preterit non perfeit (D.P.)
	完了過去	preteritz perfagz
	大過去	perteritz plus que perfagz
	未来	futurs[8)]

3. ラテン文法のわく組みが古プロヴァンス語におしつけられたものであることは，上の表に明瞭に現われている。まず，複合時制という概念はここに存在しない。まして，重複合時制には一考も与えられていない。また，一つの形式に複数の名称が付与され，一つの名称が複数の形式にあてはめられている。（なお，amava（直説法半過去）がDPにおいて接続法ともされるのは，これが条件節に用いられるからである。）

さらに特徴的なことは，実際のテキストには現われる（しかも，文法書の地の文や他の箇所の例文にも使われる）形式が，活用体系に含まれずにあることである。重複合時制もその一例である。二つの条件法に対応する複合形式もDPでは扱われないが，他のいくつかの形式に比べて必ずしも稀ではない。

また，前過去は，詩では頻繁に現われるとは言えないが，Biographies des troubadours[9)] では大過去，複合過去についで頻度の高い，重要な形式である。ところが，これはDPとLAのいずれでも扱われていない。但し，LAの項に疑問符を付けたのは，テキストに脱落があると思えるからである。「時制」の節（Ⅲ，p. 129）では確かに preteritz plus que perfags の例として yeu havia amat 以下が挙がるのみである。しかし，「法」の節では次のようになっている。

… Et ha .V. temps devezitz : lo prezen, coma yeu ami ; lo preterit imperfag, coma yeu amava ; lo preterit perfag, coma yeu amiey et hay amat ; lo preterit plus-que-perfag, coma yeu amaray〔sic〕…　(L. A., Ⅲ, p. 130 et sq.)

そして，五つの時制が区別される。現在，例えば yeu ami ；半過去，例えばyeu amava ；完了過去，例えば yeu amiey 及び hay amat ；大過去，例えば yeu amarai …

即ち，「五つの時制が区別される」と言いながら実際に例示されるのは四つであり，大過去の例とされるのは未来形である。従って，おそらく，plus que perfag の次に coma yeu avia amat ; lo futur が脱落しているのであろう。（編者の注記がない所を見ると，単なる誤植であろうか？） 但し，yeu aic amat も併せて挙げられていた可能性も否定し去ることができないので，疑問符を付けたのである。

しかし，上の表で最も目立つのは複合過去の取扱い方であろう。複合過去こそ全ての複合時制の中で基本になるものと考えられるからである。DPは活用論では複合過去を全く無視

している。ところが実際には，本文の他の個所ではこの形を用い，例文にも使っているのである。

E tut aquest qu'eu ai dit desus no se declinon …（DP, 202）

上に述べた物は全て曲用しない…

grans es lo bes que aquest m'a fait（DP, 22）

かの人の行った善は大きい。

一方，LAでは，複合過去は単純過去と併せて完了過去という名を与えられている。これは上に挙げた引用からも明らかであるが，他に，「時制」及び「直説法完了過去の誤用」の節にも，それぞれ見られる。即ち，

:… Preteritz perfags significa causa passada non ha gayre e complida, coma : yeu amey o amiey et hay amat, tu amiest et has amat, cel amet et ha amat.（LA Ⅲ, p. 129）

完了過去は遠からず過ぎ，完了した事を意味する。例えば yeu amey …

En la primiera singular persona del preterit perfag de l'indicatiu deu hom dire : yeu ame o amey o amiey o hay amat.（LA, Ⅲ, p. 159）

直説法の完了過去の一人称単数では，次のように言わねばならない…

このように，LAは複合過去と単純過去とを全く区別せず，「完了過去」を構成するものとしているのである。

4. さて，Sutherland[10]は，LAが複合過去と単純過去を一つのものとして扱っていることを一根拠として，この二つ，さらには過去の諸形の違いが文法的というよりはむしろ文体的なものだと，主張している。即ち：

The series of past tenses, the preterite and imperfect, the compound perfect, pluperfect and past anterior, primarily describe state or degree of completion in relation to the verbal concept, not degree of remoteness in time. The distinction between the preterite and the compound perfect is, I think, more stylistic than grammatical ; both express completion in the present, but the synthetic form denotes it, the form containing the past participle gives the latter its full adjectival force, and is descriptive.

Though, as a result to this, the preterite may more easily move into the narrative or historic function, it is no more remote in time, no more 'past', than the compound form.

（Sutherland, p. 45）

5. しかしながら，このように多くの形式が文法的差違なしに並列して使われていたとは，到底，信じられない。複合過去と単純過去の間には明確な文法的差違があると思われる。こ

のことを，まず，Biographies des troubadours について見ていく。

6. Biographies des troubadours として一括される作品群は，vida（伝記）と razo（解題）と呼ばれる二種類の小品の集合であるが，いずれも物語風に過去の出来事を叙述する形式をとっている。そこで，地の文では単純過去及び半過去が優勢な時制である。

これに対して，複合過去が用いられるのは（詩の引用におけるものを除けば）典型的には次の二つの場合である。

i）作者の介入において，即ち，それまでの物語の筋を作者が略述する場合である。その性質上，使われる動詞は dir「言う」，parlar「話す」，auzir「聞く」が主となる。また，定型表現化している句も少なくない。例えば：

Dig vos ai d'En Guilem de Saint Leidier qui fo ni don, ……
（Bio.，XLI，B，1）

S. L. のG. 殿が何者で，どこの出かは，諸君に語った。

なお，この場合は，他の場合に比べて，過去分詞＋（与格の人称代名詞＋）助動詞の順序になることが目立って多く，この傾向は文法書における作者の個所でも同じである。この原因は，まだよく解らない。

ii）登場人物の発言において

〈… vos don cinc cenz marcs d'argen per los dans que vos avetz receubutz.〉（Bio.，XI，L，20）

貴公の受けた損害のため，私は貴公に銀500マルクを与える。

このように，複合過去は他の過去時制とはその現れる環境が全く異なってくる。上の i）と ii）から，複合過去は発話の時点（現在時制で表されるべきもの）と何らのつながりがある場合に起こるのが基本的な使い方であると判断できよう。そうでない場合の方を例外として処理すべきである。

Et ella li dis qu'ela no l'ausiria ni l'enguanaria, c'ans l'a trait d'engan e de mort.（Bio.，XVIII，B，30）

彼女は彼に言った，彼を殺しも騙しもしないだろう，かえって欺瞞と死から彼を救ってきたのだ，と。

Mantenent se vai armar d'armas celadas e si fet〔z〕amenar son destrier, et a pres tot sol son chamin vas cella part on Guillelm era annat.（Bio.，XCIV，D，35）

直ちに彼は隠してあった武器をつけると，馬を来させ，G.が行った方へと唯一人道を進んだ。

なお，この二ケ所とも写本間に不一致があることに留意すべきかと思われる。

7. また，トルバドゥールの詩における複合過去と時に関する副詞（句）との共起関係も，複合過去の価値について明らかにする所がある。（なお，Biographies では複合過去と

共起する時の副詞(句)の例がない。) 筆者の見るところでは，この位置の副詞(句)は明らかに二種類に分類できる。

i) ar 類　「今，今や」

Mas ar m'es esquiv' e fera／Tornad' e de brava guiza, (PV. 31, 37－38)

しかし，今や彼女は私に対して猛々しく，残忍で，無慈悲になっている。

E puois oimais em vengut a la lus, (TP. 1, 25)

今や我々は光明に至ったのだから，

ii) longamen 類　「長い間，今までずっと」

qu'ieu ai sufert lonjamen per amor ; (Per. 2, 2)

私は長い間，愛の故に害を受けてきた。

Lonc temps ai amat em perdos, (GC. 9, 10)

長い間，私は報われることなく愛してきた。

Estat ai gran savo／Marritz e consiros, (PV. 34, 1)

ずっと私はつらく，苦しかった。

mais als auctors ai ancse auzit dir (Per. 2, 22)

しかし私はずっと，賢者が次のように言うのを聞いてきた。

E N'Alazais, tan vos ai ades quiza, (PV. 37, 41)

A.様，私はずっと貴女を求めてまいりました。

我々はこの二種の副詞(句)が Schlieben－Lange[11]の言う複合時制の価値の二つ，即ち resultativ 及び kontinuativ のアスペクト表示，に対応していることが確認できる。そして，この二種以外の，例えば明確に過去を示す副詞(句)は決して現われないのであり，これは単純過去，半過去との決定的な違いである。

8. Sutherland は 45ページ以下において，単純過去と複合過去の違いが単に文体上のものであることを例示するために Guillaume IX の詩を引用している。即ち：

En Alvernje, part Lemosi,
m'en aniey totz sols a tapi,
trobey la moler d'en Guarni
e d'en Bernart :
saluderon me simplamentz…
La una. m dis en son lati…
Er auziretz qu'ai respondut :
anc no li dis ni bat ni but
ni fer ni fust no ai mentaugnt〔sic〕…[12]

(Farai un vers, 11. 12〔sic〕－27＝GIX. 5, 13－17, 19, 25－27)

L.のかなた，A.に，私は唯一人，秘かに行き，G.殿とB.殿の奥方を見つけた。彼女らは私に上品に挨拶した。…一人の方が私に自分の言葉で言った。…さあ聞き給え，私が何と答えたか。何ともかんとも言わなかったし，うんともすんとも話さなかった。

確かにここでは単純過去と複合過去が平行して使われており，Jeanroy も仏訳では全て単純過去を用いている。しかし，Sutherland は触れないが，この詩を読み進めると現在時制にも出会うのである。

Per la coa de mantenen ／ Tira˙l gat et el escoissen :
(GIX. 5, 67－68)

〔彼女が〕いきなり猫の尾をひっぱると，それは爪を立てる。

このような例があるからといって，誰も現在時制と単純過去との間の差違が単に文体上のものに過ぎないとは考えない。複合過去の場合も事情は同じだと考えるのが妥当であろう。

9. 従って，我々は，Skubic[13] に大筋において同意して，複合過去は parfait，単純過去は aoriste を表わす，と見做す。しかし，Skubic が 63ページで上記 Guillaume IX の詩の25行目の例(qu'ai respondut)を，現在の状態を表わす事例としているのには納得できない。主節の動詞が未来形であるとはいえ，「答える」ことの結果が現在まで及んでいるとは，文脈上，考えにくい。

10. 結局，Sutherland の言は LA を語学書として過大評価したことから発生した誤解に基づいていた，と考えられるのである。中世の文法書がラテン文法のしき写しであった以上，その言う所を現代人の感覚によって文字通りに取ることは控えるべきであろう。

とはいえ，LAにも複合過去の用法を示唆している個所があるのである。

Ajustar no˙s pot aquest prezens de l'indicatiu am lo dig preterit imperfag, can le fagz enportats per lo preterit imperfag es del tot acabatz et hom no cosira solamen lo fag mentre que˙s fazia, ans o fa be la fi e l'acabamen, quar adonx non ha bona consequentia, coma : yeu soy sadols, quar manjava ; yeu pregui Dieu, quar me creava, quar hom deu dir : yeu soy sadols, quar hay manjat ; yeu pregui Dieu, quar m'a creat. (L.A., III, p. 147)

半過去で表わされる行為が全く終結していて，行為が行われているものとしてだけでなく，その終了・終結も考慮されているときには，この直説法現在を半過去と結びつけることはできない。次の言い方はよくない……。次のように言うべきである，「食べたので満腹している」「我を創り給うたので，神に祈る」。

確かに，ここでの主題は半過去である。しかし，この訂正の例がいずれも複合過去であって他の時制でないことは注目すべきであろう。つまり，LAの作者はここで，複合過去は現在時制と結びつく際に用いられるということを，暗黙のうちに述べてくれているのだと，考えられるのである。

11.　複合時制に関連して，中世の文法書の証言を文字通りにうけとれない事例がもう一つある。それは動詞 esser における助動詞の選択の問題である。

周知の通り，ロマンス語は ESSE に対して助動詞として ESSE を用いるもの（イタリア語など）と HABERE を用いるもの（フランス語など）に分れる。ところが，我々の見る言語ではこの両方の助動詞がみられるのである。この点で，Rohlfs[14] が「イタリア語と全く同じく，過去分詞 estat には，動詞 'to be' が助動詞として使われる」と言うのは，事実に反している。また，Schauwecker[15] が「フランス語の j'ai été に対して，je suis été の形が大抵使われる」と述べるのも，実情を正しく反映しているとは言い難い。

古プロヴァンス語は，書記法からはじまって，音韻論，形態論，さらに統語論に至るまでの様々なレベルにおいて併存形式を容認しているが，この助動詞の選択の問題もその一つであろうか。しかし，同一のテキストでわずか数行をおくだけで二つの形式が無差別に現われるような場合とは異なって，この助動詞の選択はテキストにより（あるいは，時代，地方，外国語の影響度に従って）比較的，定まっているようである。

まず，少なくとも古典期までのトルバドゥールには，筆者の知る限り，esser を助動詞とする例はなく，全て aver を助動詞としている。[16]

Mout ai estat cuendes e gais （GIX, 11, 29）
　私は大いに嬉しく楽しかった。
car salvagies, ／plens d'enveia, ／ai estat （GF, 10, 9－11）
　私は厳しく，嫉みに満ちていたから，
Estat ai com om esperdutz （BV, 30, 1）
　私は狂乱した者の如くであった。
Ben ai estat a maintas bonas cortz （AD, 15, 15）
　私は多くの素晴らしい宮廷に行った。

しかし，Biographies では，助動詞はほとんどの場合 esser であり，例外は１例にすぎない。（但し，実は，これは estar の変化形）

mout es estada bona vianda e saborida （Bio. XCIV, B, 9）
　大変よい，美味しい肉でありました。
el ages tant estat de vezer sa dona （Bio. XLVIII, b, 39）
　彼はかくも永く奥方に会わずにいた。

文法書のうち，Razos de trobar には aver を助動詞とした例があるが，一方，その影響の下に成立した Regles de trobar では esser が助動詞として用いられている。

en so qe a estat dig mal per manz trobadors...（Razos, B, 470）
　多くのトルバドゥールによって誤って語られたところで…
E son estats alguns trobadors... （Regles, H, 500）
　そして，若干のトルバドゥールがいて…

D Pには受動態のパラダイムが載っており，そのうち，大過去，接続法大過去，接続法過去，前未来の分が参考になる。Marshall の採用する本文は，大概の写本を反映して，助動詞には全て aver を用いている。従って，例えば，接続法大過去一人称単数は：

eu augues estat amat〔z〕 (DP, 465)

ところが，脚注の示すところによれば，L写本だけが一部の形(接続法大過去の二人称単数以下，接続法過去の複数)で esser を助動詞として使うのである。そこで，上掲の行はL写本でもほぼ同じであるが，

eu agues estat amatz (DP, L, 465)

すぐ下では，一人称複数で，

nos essem estat amat (DP, L, 468)

となり，二つの助動詞が混じる，全く奇妙なパラダイムになっている。直説法の大過去と前未来ではこのようなことはなく，他の写本と同じく，一貫して aver を助動詞としているだけに，この混同は誠に不思議である。

LAはこのようなパラダイムを挙げないので，地の文で判断すると，ほとんど定型表現となっている句で esser のみを用いている。

segon qu'es estat dig e mostrat per yshemples (LA, III, p. 111)

述べ，かつ，例示した所に従って

ところが，稀にであるが例文に複合過去の現れることがあり，二つの助動詞が併用されているのである。しかも，同じページで，平行した表現において。

hay estat tres ans en Tholoza (LA, III, p. 11)

私は三年間T.にいた。

yeu soy estatz a Paris (LA, III, p. 11)

私はP.にいた。

このような例は，二つの助動詞で(少なくともある時期にある地方において)併用されていたことを意味するのであろうか。

12. 古プロヴァンス語が一般的に多くの併存形式を許容している以上，esser に対する助動詞に選択の余地があったとしても，それ自体は格別のことではないとも言えよう。しかし，我々が見る中世の文法書は，あくまでトルバドゥールの言語の正用法を規範的に提示する意図で書かれたのであった。それにも拘らず，文法書における用法が詩人らの用法と合致しないことは，不可解である。一般的に，esser のような意味内容の稀薄な語に関しては，話者が意識的に捕えるのは難しい，とは言えるであろう。

13. いずれにせよ，以上に見たように，複合時制はいくつかの困難点を中世の文法家にもたらしたのであった。これは，一つには，ラテン文法を古プロヴァンス語におしつけるという，彼らのとった方法論からくる必然の結果であった。しかし，これは彼ら個人の限界というよりは，時代の制約と言うべきものである。

その制約の中でどのような努力があり，どのような成果があったかを読みとるべきであろう。その上で初めて，中世の文法書の証言を適切に解釈できるのだと思える。

* 本稿は，1980年5月24日，日本ロマンス語学会第16回大会での発表に手を加えたも

のである。構成をかなり変えたが，全体の論旨には変更はない。

注

1) J. H. Marshall (ed.), The Donatz Proensals of Uc Faidit, London, 1969.
2) J. H. Marshall (ed.), The Razos de trobar of Raimon Vidal and Associated Texts, London, 1972.
3) 同上。
4) 同上。
5) J. Anglade (ed.), Las leys d'amors I－IV (Bibliothèque Méridionale XVII－XX), Toulouse, 1919－1920. Réimpr. New York, 1971.
6) K. Bartsch, E. Koschwitz, Chrethomathie Provençale, Marburg, 1904. col. 325 sq.
7) E. Haugen, First Grammatical Treatise, The Earliest Germanic Phonology, An edition, Translation, and Commentary (Language Monograph no. 25) Baltimore, 1950.
8) Regles de trobar (87行) は esdevenidor という用語を用いる。
9) 以下，引用は全て，J. Boutière et A. H. Schutz, Biographies des troubadours, 2e éd., Paris, 1973 による。
10) D. R. Sutherland, "Elexions and Categories in Old Provençal," in Transactions of the Philological Society, 1959, 25－70.
11) B. Schlieben－Lange, Okzitanische und katalanische Verbprobleme (Beihefte zur ZRPh 127), Tübingen, 1971, p. p. 126 sqq.
12) このテキストは我々の見る Jeanroy の校訂本によるものと多少異なるが，ここでの論旨には影響がない。
13) M. Skubic, "Le passé simple et le passé composé dans la langue des troubadours" in Linguistica, 5 (1963), 61－70.
14) G. Rohlfs, From Vulgar Latin to Old French, tr. V. Almazen－L. McCarthy, Detroit, 1970. p. 64.
15) L. Schauwecker, "Sum＋to－Partizip als Perfekt Passiv des Provenzalischen," in ZFSL, 68 (1958), 211－216.
16) 繁をいとい，四例を示すにとどめるが，この他に，GIX, 4, 15 ; PV, 2, 11 ; 10, 74 ; 10, 80 ; 13, 2 ; 17, 45 ; 17, 77 ; 17, 98 ; 34, 1 ; Per, 3, 1 ; 3, 25 ; GC, 9, 51 ; および，Cercamon 3, 2 (A. Jeanroy, Les poésies de C., C. F. M. A., Paris, 1922) ; Jaufré Rudel, 4, 15 (A. Jeanroy, Les Chansons de J. R., C. F. M. A., Paris, 1924) ; Jausbert de Puycibot, 5, 10 (W. P. Shepard, Les poésies de J. d. P., C. F. M. A., Paris, 1924) などがある。

なお，本文中で略号により引用した詩のテキストは以下の通り。

AD：G. Toja, Arnaut Daniel, Canzoni, Firence, 1960.

BV：M. Lazar, Bernard de Ventadour, troubadour du XII^{e} siècle, Chansons d'amour, Paris, 1966.

GC：A. Langfors, Les chansons de Guilhem de Cabestanh, C. F. M. A., Paris, 1924.

GF：J. Mouzat, Les poèmes de Gaucelm Faidit, Paris, 1965.

GIX：A. Jeanroy, Les chansons de Guillaume IX duc d'Aquitaine, C. F. M. A., Paris, 1927.

Per：H. J. Chaytor, Les chansons de Perdigon, C. F. M. A., Paris, 1923.

TP：I. Franc, "Tomier et Palaizi, Troubadours tarasconnais" in Romania 78(1957) 46－85.